2023（令和５）年度　第１回伊賀市総合教育会議　会議録

日時　　2023（令和５）年７月１０日（月）　午前１０時から
場所　　伊賀市役所　４階　庁議室
出席者　岡本市長、大森副市長、谷口教育長、野口教育委員、内藤教育委員、中教育委員、風隼企画振興部長、東社会教育推進監、茶本学校教育課長、百地学校教育課指導主事、笠井文化財課長、中矢総合政策課長、奥沢総合政策課主幹、川北教育総務課長、藤岡教育総務課政策係長、藤山教育総務課主任
議題　（１）伊賀市まちづくりアンケート調査結果について（市長部局）　【資料１】
（２）伊賀・山城南・東大和定住自立圏の取り組みについて（市長部局・教育委員会）
【資料２、資料３、資料４】
（３）美術博物館の建設準備について（市長部局）　【資料５】
（４）ＧＩＧＡスクール構想の３年目の取り組みについて（教育委員会）　【資料６】

【事務局】それではご案内の時間となりましたので、ただいまより 2023 年度第１回伊賀市総合教育会議を始めさせていただきます。

皆さまご多忙のところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。本日の進行を務めさせていただきます教育総務課の藤山です。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、お手元に配布させていただいております事項書に沿って進めさせていただきます。

初めに岡本市長からご挨拶をお願いします。

【市長】大変梅雨明け前の暑い、蒸し暑い日が続いています。九州では線状降水帯の影響が出ていますが、幸いこちらではそのようなことはありませんが、そうした中で第１回の総合教育会議にお集まりいただき、ありがとうございます。新型コロナウイルス感染症は、３年余りの間、市民生活や経済、また学校教育の分野においても多くの影響がありました。５月８日に感染症法上の位置づけが「２類」から「５類」になって２か月が経ちました。社会全体がコロナ禍前の状況を取り戻しつつあるとはいうものの、感染への人々の関心も薄れてきているところも気にかかるところです。また、第９波を懸念する報道もあり、まだまだしっかりとケアしていかなければならないと思います。

５月２９日に梅雨入りということでしたが、雨や曇りの日が多く、６月２日には、市内で大雨による土砂災害の危険性が高まりまして、今年最初の避難所を開設しました。幸い、大きな災害には至りませんでしたが、大変皆様にはお世話になりました。今後も台風の接近など、出水期でもありますので災害や異常気象による気温上昇などにも備え、迅速な対応ができるよう取り組む必要があると思っています。

繰り返しになりますが、４月から小中学校の給食費の無償化が始まっているところです。児

童生徒にとっての学校給食の果たす役割は非常にいろいろな面で重要なものと考えています。食を保障し、子どもたちの健やかな成長に向けた取り組みを進めるとともに、それぞれの学校現場においても基本的な感染対策は引き続きお願いしながら、マスクの着用などにも十分に気を配っていただくなど、また熱中症対策もお願いしなければならいと思っています。

さて、この総合教育会議ですが、皆さんご承知のとおり、伊賀市の宝である子ども達がより良い環境で学べるように、私と教育委員会が伊賀市の教育の在り方について協議と調整を行うものです。皆さんの忌憚のないご意見を頂戴したいと思っています。

本日は、大きく４つのテーマで意見交換をお願いすることになっています。市内の子どもたちだけでなく、生活圏を共にする定住自立圏域での取り組みや、美術博物館の建設準備の状況、３年目となった GIGA スクール構想での取り組みといった、将来を担う子どもたちにとって有意義な事業になるよう、様々な角度からご意見を賜りたいと思っています。

限られた時間でございますけれども、最後までどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【事務局】ありがとうございました。

本日、ご出席いただいています皆様につきましては、お手元の名簿のとおりとなっております。なお、谷本教育委員につきましては、都合により欠席させていただいております。

それでは早速ですが、協議事項に入らせていただきます。この総合教育会議は、市長と教育委員会が十分な意思の疎通を図り、協議、調整し、課題や方向性を共有しながら教育行政に取り組むものでございます。いろいろとご意見やご提案をいただければと思いますのでよろしくお願いします。

本日の資料につきましては、教育委員以外の方は、パソコンのデスクトップにあるオフィス公開キャビネットの教育総務課のホルダーの中に第 1 回総合教育会議のファイルがありますので、それを見ていただければと思います。また、教育委員の皆様は、タブレットに資料を掲載させていただいておりますのでファイルを開いていただければご覧いただくことができます。資料の準備はよろしいでしょうか。本日の協議事項につきましては、報告事項や情報共有などを含めて大きく４つのテーマでの進めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

それでは１つ目の項目「伊賀市まちづくりアンケート調査結果について」を企画振興部総合政策課から報告をお願いします。

【総合政策課長】　まちづくりアンケートの結果ということで資料１をご覧ください。毎年、年度末にアンケートをとっていまして、今年の２月から３月にかけて実施した市民意識のアンケート結果となっています。どんな取り組みに対してどんな課題があるのか、といったことを確認するうえで毎年実施しているものです。資料の１ページをご覧ください。２月１０日から３月３日に実施し、アンケートに答えていただいたのが７４１人、３年前からコロナを機にＷＥＢでのアンケートに切り替え実施しています。３年前は、アンケートの全体の協力者数が８

４５人、次の令和３年が９３９人となっていましたが今回の３月のアンケートでは７４１人となり、少し下がった状況です。最初のうちはアンケートをＷＥＢで行ったことでアンケートそのものに回答するということに対する興味もあったと思いますが、だんだんとアンケート慣れしてきたのではと思っています。アンケートの母数をきちっと確保できるように工夫したいと思っているところです。アンケートを紙からＷＥＢに変えたことによって、次の２ページで協力いただいた方の属性のうち年齢を見ていただくとある程度全世代の皆さんから協力を得られるようになったと思っています。紙で行っていた時はご高齢の方の協力者が多く、若い人が紙でアンケートに協力してもらえてなかったが、３年前に導入したときは逆にグッと若い世代が協力者になったのですがだんだんと全世代的に比較的まんべんなく協力をいただいているそんな状況です。

アンケートの１２ページをご覧ください。まちづくり全体の施策を３８に分けて、その３８個に対して市民の皆さんがどう思ったのか、それぞれを４年前から追いかけて一覧にしたものです。１２ページの一番下に平均値を出しています。一番左側が４年前で、これは紙で行っていた頃で満足度に関しては低かったのですが、ＷＥＢに切り替えた時にアンケートに協力するということはある程度、街づくりに対して肯定的な方々の層が増えたのではと思われ、満足度に関しては３年前にグッと上がりました。その次の年もすこし上がりましたが昨年は若干下がりました。全体の平均値としてそんな状況です。

次に１５ページをご覧ください。こちらは参画度になります。皆さんがそれぞれの施策に対してどの程度ご自身が参画されていますかということを聞いています。コロナによって昨年は、いろいろな街づくりへの参画が減っていましたが、今回はコロナ前の状況まではいきませんが若干回復してきた状況です。

１６ページをご覧いただくと、今年のアンケートをとった時の３８個の施策に対して皆さんの満足度の状況を施策ごとでの比較が見ていただくことができる表となっています。一概にどの施策とどの施策が、満足度が高いとか低いとかだけで測ることはできないと思いますが、一定こういった形で見える化をしています。特に中心市街地活性化とか公共交通とか都市基盤とかが今年だけではなく、前年、前前年を見ていてもずっと満足度が低いという状況であって、一方で生活環境の中の水道とか一般廃棄物、いわゆるゴミとか安心安全な暮らしとかは、例年比較的伊賀市の住民の皆さんの満足度は高く、おいしい水が飲めて、環境が自然豊かできれいだという感覚を持っていただいていると思います。

次の１７ページをご覧ください。今度は参画度になります。どれだけまちづくりに参画していますかと聞いています。こちらについても低いのは公共交通とか、聞きなれない言葉なのかもわかりませんが定住関係人口といった施策に対する参画度が低い状況となっています。

１８ページでは３８の施策を参画度と満足度でＸ軸とＹ軸に置き換えて、赤い点線が参画度と満足度の平均となっています。右上へ行けば行くほど参画度と満足度の両方が高くて、左下へ行けば行くほど参画度も満足度も比較的低い施策が並んでいるといった状況です。

次の１９ページ以降は、それぞれの分野ごと、７つの分野ごとの状況を細かく分析した表となっています。教育の分野については２７，２８ページになっています。教育人権の分野では、

傾向として、満足度は平均より比較的高い状況にあって、参画度については、平均もしくは施策によっては若干他の平均より低い状況となっています。

２９、３０ページでは、文化地域づくりということで、歴史、文化遺産、文化芸術、多文化共生、スポーツなど教育行政に関わりの深い施策が並んでいますがこの分野の傾向としては、参画度がやや低くて満足度はやや高いような状況にあって、スポーツと定住関係人口については満足度もやや低い状況が見ていただけると思います。

こういったアンケートをとって、それぞれの部局へも結果を共有させていただいて、毎年夏までに昨年度の振り返りと今後に向けた取り組み、課題を整理して、次にどんなことをしていかなければならないかといったことをこのアンケートの結果を踏まえて、全庁的に次の課題をまとめている状況です。説明は以上です。

【事務局】ありがとうございました。報告しましたまちづくりアンケート結果についてご意見、ご質問等ございましたらお願いします。

【市長】アンケートの２９歳以下となっているのは何歳からなのか。
【総合政策課長】１８歳からになっています。
【市長】若い世代が低いのはどうしてなのか。大体みんな同じように関心を持ってくれているが、２９歳以下で１８歳から大人なのにどうしてなのか。自分たちの関心のある事項が少ないと思っているためなのか。この子たちが未来を創っていくことになるのだが。
【総合政策課長】課題等を統一しながら次に繋げていけるようにしたいと考えています。前年などはもう少し若い世代も多かったのですが、慣れてしまって新鮮味がなくなってきたのかもしれないように思います。
【教育長】全体的に下がった傾向は何かあるのか。満足度は高い方がいいと思うが。
【総合政策課長】それぞれの施策と比べてグッと下がっていれば気にしなければならないと思うが、アンケートの母数自体も７００から１０００弱ぐらいなので揺れもあると思います。０．５下がったとか上がったとかで、気にすることはないが、もし５％、１０％下がっている、上がっているということであれば、何らかの原因があると考えられます。このアンケートでは原因まで突き詰めることはできませんので、ずっと傾向として下がったり、上がったりしているところは、自分のところの問題としてそれぞれの分野で細かく分析をしてほしいと伝えています。

アンケートの聞き方によっても、比較的参画しやすいような聞き方の設問もあれば、ハードルの高いものもあります。比較的参画度の高いような施策は、アンケートでも自分が参画していると答えやすいような質問の仕方になっているものもあるので、一概に他と比較するのではなくて昨年の動きとかも見てもらいたいと思います。

【事務局】他、いかがでしょうか。また、何かありました最後でも結構ですのでお願いします。

続いて２つ目の項目「伊賀・山城南・東大和定住自立圏の取り組みについて」になります。はじめに資料２の第２期共生ビジョンの概要と資料３の取り組みについては総合政策課から、そのあとに資料４の教育部会の取り組みを学校教育課から説明をお願いします。

【総合政策課】　資料の２をご覧ください。伊賀市と京都府の南山城村、笠置町、奈良県の山添村、４つの自治体で広域連携として取り組んでいる内容です。総合教育会議では初めてお話しする内容なのでまず全体の話をさせてもらいます。昨年の４月にこのビジョンをまとめました。第２期になっているので５年前からこのビジョンがあって、新しく第２期になって２年目に入っている状況です。５年前のビジョンを作る前に伊賀市と南山城村、笠置町と一緒になってどういった広域連携ができるか数年かけて話をしてできたもので、途中で奈良県の山添村もここに参画されたものです。

資料の１ページには、定住自立圏共生ビジョンとは何かといったことを記載しています。これは総務省が提唱している連携の在り方になりますが、定住自立圏とは中心市、中心となる街が持っている都市機能と連携する自治体が持っている地域の魅力を活用しながら大きな広域としてその街に人々が住み続けられるような取り組みをするのが基本となっています。今の伊賀市の広域連携の枠組みでいうと伊賀市が中心市、後の自治体の皆さんは連携する自治体という位置づけになっています。伊賀市は中心市となっているのでリーダーシップを発揮しながら取り組みを進めることとなっています。

７ページには、各市町村の人口と面積がありますが、ほとんどが伊賀市の人口が占めており、そういったことからも伊賀市が中心市となっています。

１０ページの下のグラフをご覧ください。定住自立圏での広域の枠組みは、人の流れがどうなっているのかというのが一番の要件として必要となってきます。通勤とか通学でどれぐらいの人の流れがあるか総務省からも確認が求められていて、笠置町から伊賀市に今は通学していないので通勤されている方が働いている世代の中で８．２％、南山城村からは２５．５％なのでおおよそ４人に１人が伊賀市へ仕事に来ている、山添村では１９．６％なので５人に１人は伊賀市へ仕事を求めてきていただいている。このあたりが伊賀市を中心とした人の流れがある自治体として連携している状況です。

１１ページからもそういった状況として、伊賀市にある都市機能、例えば大きな病院などをどれだけ利用しているのかを記載しています。上野総合市民病院や岡波総合病院へこの圏域の皆さんがどれだけ通院されているかが見て取れます。そういったことでこの定住自立圏の枠組みで一緒になって街づくりを進めていこうと取り組んでいます。

どんなことを今まで取り組んできたかは、１５、１６ページにかけて前の第１期のビジョンの中で取り組んできたことをまとめています。「健康ダイヤル２４」を圏域のものとして取り組んだり、「バスツアー」や「シンポジウム」「カヌー体験教室」を企画したりとか、「Ｎ－１グランプリ in いが」で定住自立圏域の住民の皆さんが取り組んでいる活動などを紹介したりとかで一体感の醸成を進めてきたものです。特にコロナの時に都道府県の境目で人の動きを控えましょうといったことが起こった時に、この定住自立圏の笠置町、南山城村、山添村から比較的

伊賀市の病院へ通ったり、仕事や買い物にも来られているし、県境を跨ぐ移動の自粛が行われたときに生活をしていく上で支障になることから、圏域証を急遽作成して車のダッシュボードに張ってもらったりして、私たちは生活圏を一緒にしているので京都ナンバーや奈良ナンバーであっても伊賀で買い物しているのは生活のためですといったことを認識してもらう、これが比較的、圏域の住民の皆さんに安心感を持ってもらえる取り組みにつながったと思っています。また、コロナの時に伊賀市のプレミアム商品券を圏域の皆さんも対象として使ってもらえるようにした取り組みも行いました。

１７ページ以降が第２期のビジョンをどんなテーマで取り組むかを掲げています。第１期からの「水と歴史でつながる圏域」をメインの柱としながらコロナのことを踏まえて、ＤＸを進めることやＳＤＧｓを意識して取り組むこと、住民の一体感を養わないといけないが幼少期からしないと一朝一夕にはできないので、幼少期からの圏域の一体感を交流事業を通して取り組むことなどもテーマとしています。

２３、２４ページには、取り組みの全容を記載しています。政策、施策、事業に分かれていますが、実際には事業レベルで毎年の進行管理を行っています。例えば教育の政策では、教育環境、文化芸術振興、スポーツ振興、生涯学習、図書館運営といた事業の枠組み決めて、それぞれの取り組みを毎年進めていただき、縦の分野に属さないものは横串を刺して取り組むこととしています。

このビジョンに基づいて毎年事業を進めていますが実際どんなことをしているのかは資料３をご覧ください。昨年から今年にかけてどんなことをしていたのか、どんなことをするのか主なものをまとめています。

１つは、特にこの定住自立圏は、京都と奈良の自治体と連携しているので、また万博もあるので関西に向けての情報発信や向こうの情報を入手したりしないといけないので関西ＳＤＧｓプラットホームという組織に入会させていただきました。

次に、令和５年の高校入試から、今は京都の笠置町や南山城村からは三重県の伊賀にある高校へは一部を除いて進学はできなかったが、この枠組みを広げてもらうよう三重県へ働きかけをさせていただき、上野高校、伊賀白鳳高校、あけぼの学園高校へ通えるように取り組みを進めました。

また、企業版ふるさと納税の制度があり、ふるさと納税は、個人が自分の故郷に寄付をする制度でその企業版になります。定住自立圏の取り組みに寄付を募るプロジェクトとして選定させていただき、しっかりと企業からの寄付を財源に活用させていただくこととしています。企業版ふるさと納税を対象とした事業には、比較的子どもを対象としたものもあり、特に企業に寄付を募るものなので未来志向の取り組みなどの事業に活用しようと、プロジェクトとして求めています。

今年の取り組みとして大きく３つの事業を上げさせていただいています。

一つ目は、空からこの圏域を子どもたちに体験してもらうことを考えています。今のところ１１月に予定しているもので、小学校の高学年の子どもたちに募集をして、ヘリコプターに乗ってもらって、水と歴史でつながるこの圏域がどのような地形になっているかとか、どんな歴史

に中にあるのかといったことを皆さんに体で感じてもらえたらということを計画しています。二つ目は、伊賀市の島ヶ原と南山城村がちょうど三重と京都の境目になるが、お互いに県境で発生した災害に対する意識を共有するための取り組みを進めること。
三つ目は、毎年、島ヶ原で実施しているお祭りも定住自立圏の後援事業として認定して、南山城村との交流も進めていこうとしているものです。
引き続いて、教育委員会から教育部会の取り組みについてお願いします。

【学校教育課長】資料４をご覧ください。教育委員会からは、定住自立圏共生ビジョンの教育部会の取り組みについてもう少し詳細に説明させていただきます。２ページには先ほども説明がありましたが、令和４年度の取り組みにつきましては、高校進学エリアの拡大ということで大きな成果がありました。第１期の共生ビジョンの折からも高校進学エリアの拡大を目標に掲げていましたが、なかなか調整が難しく、南山城村の子どもさんたちの人数調査も行いましたが該当もないこと、そのうちコロナ禍に入ってしまってなかなか活動ができないまま第２期に突入したのですが、昨年度、特に市長、教育長、南山城村長、笠置町長が三重県教育委員会の教育長へ直接要望に行っていただくといったことを契機にグッと取り組みが進みました。３月末には笠置町、南山城村の生徒さんが上野高校、伊賀白鳳高校、あけぼの学園高校へ志願できるといった覚書を結ぶことができました。もう少し詳しく言いますと、伊賀白鳳高校の建築デザイン科のみ今まで可能ということで、笠置町と南山城村で笠置中学校という１つの中学校があって、そこから通える建築デザイン科がなかったということで特別に認めていましたが、今回、この定住自立圏での取り組みを県の教育委員会でも評価していただいて、高校の活性化、地域の活性化につながっていくだろうということで認めていただきました。ちなみに山添村からは上野高校や伊賀白鳳高校にも通うことができますし、あけぼの学園高校への志願も条件が整えばできる状況となっています。
次のページをご覧ください。令和５年度の取り組みについて、引き続き地域に「誇り」「愛着」「共感」を持って、地域のために自ら関わっていこうとする人材の育成に努めていきたいと考えています。２期目の共生ビジョンでは、圏域内の小中学校において、タブレット等のＩＣＴを活用した児童生徒の交流を図るといった目標を創りました。昨年までは少し動きがつくれなかったのですが７月４日に教育部会を南山城村と笠置町の相楽東部広域連合教育委員会と山添村の教育委員会に来ていただき開催させていただきました。教育部会は文化、芸術、スポーツ等ありますが、今回はこの交流に特化した検討を行いました。部会では、この方向で進めていこうということで合意を得られましたので、７月から指導主事、関係の学校など、そういったところに働きかけをして、そうしたレベルで打ち合わせを行い、詳細を決めていこうと考えています。準備の方は、夏休みにも入りますので秋にはこういった事業が１１月から１月にかけて出来ればいと考えています。内容は、これから学校との話で決まっていくことになりますが、例えば小学校３年生では、地域学習をそれぞれ行うので、自分たちの街のことを学習して、そのことをお互いに交流しながら、互いの良さを知るような場面をつくっていってはどうかとか、個人にはなるが読書活動の中で読んだ本を紹介しあう機会を設けるとか、キャリア教育の

交流ということで総合的な学習の時間で取り組んだこととか職場体験実習とか、将来のことを考えて学校で学習しているような内容の交流ができればと考えています。平和学習の交流ということでは、特に伊賀市では広島に中学生を派遣していますので、そういった中身の交流とか、山添村では沖縄への修学旅行で平和学習をしていると聞いていますので、どれもということではなくて、本年度初めてなので、できるとこからまずはやってみるという形でできればと準備を進めているとこです。

【事務局】ありがとうございました。定住自立圏での取り組みということで多岐にわたりますが説明させていただきました。皆様からご意見、ご質問やご提案等ございましたらお願いします。

【市長】第１回教育部会の話の中で、資料では黒の字とブルーの字があるが何か意味はあるのですか。

【学校教育課長】伊賀市の教育委員会としてブルーの字の事業が取り掛かりやすいのではないかと思い、少しボリュームをつけて宣伝したものです。

【副市長】覚書の中身について、負担金を払うことになっていて、３０人を超える受け入れ生徒数分の負担金を甲に納めとあるが具体的にはどういう理由なのか。

【学校教育課長】笠置町が令和４年度の卒業生が１９名、すべて伊賀市に来ていただいても負担金は納める必要はありません。負担金についての記載はありますが、実際には負担金を納めるような条件になることはありません。

【副市長】要するに３０人を越えなければ負担金は必要ないということですね。
【学校教育課長】そういうことになります。伊賀市だけではなく奈良、京都だけでなく、和歌山とかにもこういった覚書ものがあって、その関係もあってのことと思われます。県立高校には県費を充てて県民である生徒さん用にお金を出していく、なので外から来た場合は、たくさんの場合は負担金を出してくださいというお約束になっているものです。
【副市長】３０人単位で考えることなのですね。これは笠置と南山城だけだがそれ以外のところも想定しているのですか。
【学校教育課長】この覚書は、笠置と南山城だけです。負担金については、約束はしますが笠置と南山城の人口が猛烈に増えない限り発生しません。令和４年度の笠置中学校の全校生徒は４７人なので、負担金について記載されていても実際に納めることはないと思われます。
【副市長】この覚書は今年からなのですか。制度の運用は４月からですか。
何人ぐらいですか。
【学校教育課長】今年、受験をする子どもから対象となります。まだゼロです。

【副市長】負担金は、実質受け入れた人数で受験した人数ではないですね。
【学校教育課長】その通りです。
【副市長】実質ゼロですか。
【教育長】今はゼロです。県もたくさん来てもらっても今度は、伊賀の子どもの受験を圧迫してしまうこともあります。
【副市長】現実この２つの町村には高校はないのですね。うちからそこへ行く可能性はないが、京都府の公立高校へ伊賀の子どもが行くことはあるのですか。その場合の規定はあるのですか。
【学校教育課長】規定はありません。
【副市長】あった場合は可能ですか。
【学校教育課長】協定を結ばないとできません。奈良県の方には、今は山添分校へ行かせてもらっていますが京都とはありません。今回の覚書も京都府教育委員会と三重県教育委員会との約束事ではなく、京都府教育委員会も府の境にたくさん自治体があるので京都府教育委員会としてではなく、相楽東部広域連合と結ぶことは問題ないということで結ばせてもらった。京都府の他の学校とはこれは該当しない覚書です。
【副市長】奈良とはこういった協定はあるのですか。
【学校教育課長】あります。
【市長】伊賀の子どもたちは奈良に行っているのですか。
【学校教育課長】（山辺高校）山添分校へ行っています。
【副市長】奈良には何人ぐらい行っていて、何人ぐらい来ているのですか。
【学校教育課長】奈良県からは令和４年の実績はありません。伊賀市から山添分校へ行っているのは令和４年の実績で１名、令和３年で９名行っています。
【教育長】名張からも山添に行っているし山添の子どもも名張にも行っています。伊賀へゼロというのは、バスが山添から名張へ行っているのがいくつかあってその通いやすさがあるので名張へ行っている可能性があります。山添分校も２年後には無くしていく予定だと聞こえてきています。将来は分校としては無くしていく方向と聞いています。
【副市長】山添分校は農業専科ですか。
【学校教育課】農業と家政科です。
【市長】余談になりますが、近いうちに教育長と私で県の教育長のところへ行って上野高校の活性化について話をしに行こうと思っています。
【教育長】子どもが地域でどんどん減ってくるので高等学校をどうしていこうかというのも一番の課題となっています。上野高校へ名張から過去はたくさん来ていましたが最近はあまり来なくなって、名張からも津へ行ったりしているので上野高校の魅力化をしてもらわないとこの地域の高校の活性化が見込めないということで市長も一度、県の教育長と懇談を検討しようと考えています。
【市長】県は伊賀市に２校、名張市に２校にしたいと思いがあるみたいですが、近隣からも特色のある学校に来ていただければいいと思います。

【事務局】よろしいでしょうか。また、何かありました最後でも結構ですのでお願いします。続いて３つ目の項目、「美術博物館の建設準備について」資料は資料５になります。企画振興部の美術博物館建設準備室から説明をお願いします。

【美術博物館建設準備室長】美術博物館の建設に関しまして、資料５をご覧ください。
伊賀市に美術博物館を建設していくことについて、これから検討を始めていくわけですけれど、その前提となる、今の伊賀市の現状と課題やこれまでの経緯、そして、美術博物館がなぜ必要かということについて、説明させていただきます。
伊賀市が抱えている課題ですが、芭蕉さんのふるさと、伊賀市には、芭蕉さんを顕彰する施設として、上野公園の中に『芭蕉翁記念館』があり、芭蕉さんの直筆と言われる俳諧資料など、数多くの資料を保存しており、展示室で展示をしています。
しかし、この記念館は建設されてから 60 年以上が経過していることから、老朽化が進んでおり、例えば、資料の保存においては、収蔵庫の温度管理ができないとか虫の害への対策が十分でないなどの課題があります。
また、伊賀市は指定文化財の数が県内最多となっており、市としても多くの古文書や考古遺物を所蔵しているなど、全国に誇る歴史・文化の文物を持っています。
さらに、伊賀市出身の作家の作品など、多くの美術作品が市に寄贈されているところですが、伊賀市には、歴史・文化、芸術に関する資料を適切に保管する施設がない、また、市民や来訪者にその価値を知ってもらうための博物館や美術館といった施設がないところが、大きな課題としてあります。
そうした課題がある中、新しい芭蕉翁記念館の建設の検討につきましては、平成６年、芭蕉翁生誕 350 年の事業の一環として検討が始まり、その後、何回かにわたり建設の議論が行われ、基本構想や基本計画、事業計画などを策定してきました。
しかし、以降の進捗については、旧上野市庁舎の整備計画の検討結果を待つということになっています。
また、美術館に関しては、平成１８年２月に、市へ美術館建設を求める陳情書が提出されました。
その内容としましては、「旧上野市の中心部で文化関連施設の近くに美術館を建設してほしい」ということで、その後、市議会へも同じ内容の請願が提出され、採択されています。
また、平成２６年にも「旧上野市庁舎に美術施設だけでなく、芭蕉翁記念館や歴史的博物館などを複合し、維持管理経費削減と効率の良い運営をもたらす複合施設の実現を強く要望する」という内容の要望書が提出されるなどの民意が示されてきたところです。
なお、博物館につきましては、資料には記載していませんが市の審議会において、委員より博物館の必要性をご意見としていただいているところでもあり、市としても伊賀市総合計画の第３次基本計画の中で、「文書館の設置により公開・保存・管理体制の整備に取り組みます。」など掲載しているとおり、課題として認識をしているところです。
また、これも資料にはありませんが、昨年の６月議会では、コロナ禍における美術鑑賞の機会

を創出する取り組みとして、バーチャル美術館を構築する予算案を提出しましたが、その際、議員から、「バーチャルよりも今優先すべきは、美術品を適切に保管する体制を整えること、そして、市民や市外の皆さんにより身近に実物の美術品に触れてもらう機会をつくるべきである」といった意見も出されたところです。
市としましては、こうしたことを踏まえ、俳諧や、歴史・文化、芸術に関する資料は、先人たちのたゆまぬ努力によって大切に守り、私達に伝えていただいた伊賀市の宝物であることから、市が所蔵する資料について、市として、しっかりと守り、そして次の世代に引き継いでいくための施設が必要と考え、美術博物館を建設することとしました。
その美術博物館では、それらの資料を活用し、未来を担う子ども達に五感で触れていただくことで、豊かな感性を育て、文化を大切にする心を育んでもらえるような取り組みも進めていきたいと考えています。
その検討を進めるため、「伊賀市美術博物館建設準備委員会」を設置しました。
本日の午後に、はじめての委員会を開催することとしています。ちなみに委員は、資料に記載の 13 名を委嘱する予定としていまして、学識経験者や市内公共的団体を代表する方、市民からの公募などによりまして、施設設備の内容や規模、設置場所などについて専門的かつ広範な見地からご意見をいただきながら具体化していこうと考えています。
ちなみに、最後のページには、美術博物館のイメージを付けています。
美術館、博物館、芭蕉翁記念館の３つの施設を総称して美術博物館としていますが、それぞれの詳細につきましては、今後、準備委員会の中で検討していただくこととしています。
伊賀市美術博物館についての説明は以上となります。

【事務局】ありがとうございました。美術博物館建設準備の説明をいただきました。本日の午後に第１回の建設準備委員会が開催されるということで、ここから議論が始まりますが、皆様からご意見、ご質問やご提案等ございましたらお願いします。

【教育長】教育委員会としてもこれまで議会の中でいろいろなところに文化財がある、散らばっていることとか、図書館にもありますし、それをどこかにひとつにまとめていく必要性があると言わせていただいている。
今日は欠席している谷本教育委員からもこの件について意見を聞かせていただいたら、２点お話をいただきました。一つは、伊賀には文化財がたくさんあるのでそれを市民に知らせるようなものが必要であろうということです。１つの建物の中でもいいですし、市内のあちこちに散らばって、例えば古民家など、そういったところを使いながら回遊出来て見て行けるといった案も必要で、何らかの形で美術博物館は必要であると言われていました。
もう１点は、今も県美で日根野作三展が行われていて、伊賀の人で伊賀のクラフトデザインの先駆者と言われていますが、その方の作品も伊賀の人であるが土岐へ出て行ってしまったりしている。土岐にはたくさんある。日根野さんが市に寄贈するといったときにもらわなかったこともあって、やはり作品をいただけるとうことであれば、そういう面でも美術博物館があれば

そこにということでいただくことも可能となるいので必要であろうと、伊賀の作品が他へ出て行ってしまうこともあるので是非とも美術博物館はそういった面でも必要であるし、また今もいろいろな方から寄付があればもらってもらい美術博物館に飾れるということで伊賀にとって大事な施設であると意見をいただいた。
【内藤教育委員】説明をいただいて、今構想している美術博物館のビジョンというか在り方についてよくわかりました。青山に伊賀市ミュージアム青山讃頌舎があるが、そちらとは違って大々的にこちらにいろいろなものを寄贈していただくものを受け入れて、皆さんに見ていただく場所だということはよくわかったのですが、今あるこちらの博物館との連携ですとか、あるいはここのみならず伊賀市の北部に今後そういったものが出来上がっていったイメージの中にでも、そういったものをより広く連携するような体制というものを今後とられていくのかどうか、お互いの美術館博物館の立ち位置みたいな関係性みたいなものはどのように進めていただくのかを教えていただけますか。
【美術博物館建設準備室長】今いっている美術博物館は、市の中心的なもので、そこには適切に保管できる保管庫をつくりたい、もちろん展示するということも必要であるがそういった施設をセンターとして作りたいと考えています。青山讃頌舎は展示施設であり、展示はできますが、ものを入れる保管庫はありません。センターの美術博物館をつくって、サテライトみたいなイメージで、例えば青山讃頌舎で企画展をしていただいたり、阿山の伝産会館で企画展をしたりとか、そういった使い方や古民家や崇広堂を使ったりしていきたいし、そういう形でセンター機能としたものをつくっていきたいと思っています。適切に保管できる保管庫がないことが一番の問題なので、その部分を解決しながら活用の方を考えていければと思っています。
【市長】本館と分館と思っていただければといいと思います。青山の環境の中で観ていただいたらいいものがあるし、本館であんな素晴らしい空間はないと思います。
【副市長】伊賀市にはいろいろな美術品や文化財があると言われているが、具体的にどんなものがあるのか、主要な作品はどんなものか市民に何かわかるようにしてほしい。芭蕉顕彰会の理事会でも話をしたが顕彰会の正味財産として一般財団法人なので財産になっているがそれが約５，０００万円、その価値をどのように決めたのかというと十何年か前に法人改革があった時にザっとした数字で決めたというんですけど、その財産がどれだけの価値があるのか、お金の価値になるが、見直しをしたらどうかと言わせてもらった。
伊賀市として美術品や文化財の主なものでいいので市民に分かりやすくなるようなリストみたいなものが必要ではないかと思いました。伊賀市にはよそにないような立派な資産がある、美術品があるからやるんだということをわかるようにしたらいいと思います。
【美術博物館建設準備室長】例えば芭蕉翁の資料だけではなくて文化財についても伊賀市はいいものを持っているというのを知らしめていかないと必要なものだとわかってもらえないと思うので検討していきます。
【副市長】ハードじゃなくてソフトが大事であるので、どういったソフトを持っているのかがないとつくる意味がないので検討をお願いします。

【事務局】続いて４つ目の項目になります。「GIGAスクール構想の３年目の取り組みについて」、資料は６になります。資料に基づいて学校教育課から説明しますのでよろしくお願いします。

【学校教育課】資料６をご覧ください。ＧＩＧＡスクール構想伊賀モデル～２年間の軌跡と３年目の挑戦～を説明させていただきます。
２ページをご覧ください。伊賀モデル～２年間の軌跡と３年目の挑戦～ということで、「引き出したいのは子どもがハッとする気づき、タブレットＰＣが持つ素の力を活用して、子どもたちの学びを広げていく」これをコンセプトとしてこれまで取組を進めてきました。
３ページをご覧ください。伊賀市の軌跡で、国のＧＩＧＡスクール構想の実現ということで令和２年度に準備がありました。伊賀市でも、まずは１人１台端末を準備するというところで、今現在、子どもたちが使っているウインドウズのタブレットをダイナブックという会社から７，０００台の調達を行いました。また、授業で活用するものとして先生が子どもたちに配信をする、次に子どもたちが先生に提出する、というようなやり取りができるように授業支援ソフトのロイロノートを使っています。他に、子どもたちの家庭学習に使えるような教材でｅライブラリーというドリルを活用しています。令和２年度は、端末を使い始めるために、まずは先生たちにどんな使い方をしていくかということで教員の研修を月１回程度進めてきました。令和３年度４月から子どもたちが、１人１台端末を使っての授業がスタートしました。新型コロナウイルスの感染拡大があった９月には、午前中は学校で授業をして、昼からはタブレットを持ち帰って、マイクロソフトのチームズという遠隔でも学習を続けることができるテレビ会議システムを活用してオンライン学習をスタートしました。１１月からは本格的に持ち帰り学習をスタートしました。これらが令和３年度のおもな取組になります。ＩＣＴ活用推進校について、タブレットの活用が始まって令和３年から５年と推進校を決めています。伊賀市の中で今小中あわせて２８校ありますが、その中の５校を活用推進校に指定をして、先進的な取り組みを進めています。その中で３年、４年取り組んできた成和西小学校、緑ケ丘中学校で伊賀市の先生方を集めて取り組みの成果発表会を行いました。また、令和４年度は常勤の教職員、およそ６５０人程度を集めて、参加できない場合はオンラインを活用して、ハイブリッドの講演会を行いました。また、管理職、担当者を対象にした研修会では、主に実践報告などを行いました。先生方のいろいろな授業で活用した教材を伊賀市全体で共有できるように授業支援ソフトのロイロノートを使って教材の共有も始めました。
４ページをご覧ください。伊賀市の取り組みということで、今年令和５年度が３年目になります。それぞれの年度で活用目標を決めてきました。令和３年の１年目は、まずは先生方、子どもたちにタブレットに慣れてもらうということで、様々な場面における活用方法の開拓で、まずは使ってみましょう、という取組を進めました。２年目、令和４年はタブレットＰＣ導入を契機とした授業改革。これまでの授業というのは黒板があって教科書とノートが机の上にありました。そこにＧＩＧＡスクール構想によって１人１台のタブレットが入ってきたので、このタブレットをどういうふうに効果的に学習に使うかということで、まずは授業改革を考え、その上で持ち帰りを積極的に進めることで、学校と家庭の学習を切れ目なくつなぐという取り組

みを進めてきました。今年令和５年度については、学年や教科の境界を越えた深い学びというのを目指しています。引き続き、持ち帰りを積極的に進めて学校の授業と家庭学習を切れ目なくつなぐということにも取り組んでいます。
５ページをご覧ください。教育委員会では、東京学芸大学の森本康彦教授を活用アドバイザーに迎えて、いろいろな実践などを教えてもらいながら、ＧＩＧＡスクール構想伊賀モデルをつくりました。今まで活用がなかったタブレットを授業でどのように使えばいいか先生方にお示しするには、モデルをつくるのがいいのではと思い伊賀モデルを考えました。
次のページをご覧ください。そもそも「学ぶ」とはどういうことなのか、もちろん暗記、覚えることも必要なのですが、自ら考え気づくこと、子どもたちが授業の中で、自分で気づくということが大切だということが分かっています。
次のページをご覧ください。学びが起きる、気づきを得る４シーンということで、１つの授業の中でこんな場面があります。まずは先生からの指示を聞いたり黒板を見たり、自分で考えたり、ノートに書いたり、実際に手を動かしてやってみたり、または隣の人、グループを使って話したりするとき、自分の考えに気づくことができます。
８ページをご覧ください。伊賀モデルは、タブレット活用に特化したものではなく、これまでの授業の上にどのように使えるのかということを考えたものです。６つのベーシックステップを考えました。一つ目、課題を知る、二つ目、その課題に対して個人で考えてみる、三つ目、隣の人やペアを活用して、自分で考えたことを、対話を通してお互い聞きあう、または仲間と一緒に制作に取り組む、協働して課題に取り組む、それを受けて全体でグループで考えたことを交流する、最後に再び自分の今日の学びを振り返る、ということを行ってきました。この中でタブレットＰＣを効果的に使える場面はどこか、どうしたらいいのかということを、研修を通して考えてきました。
次のページをご覧ください。では実際の授業に当てはめて伊賀モデルの実践事例を少し報告します。
次のページになります。これは活用推進校である上野東小学校の１年生の事例です。１年生からタブレットを活用しています。体育の授業です。鬼にタッチされないようにゴールまで宝物を運ぶという授業でした。まずは、先生から課題とルールを聞きます。その後、見学している子どもたちがその様子を自分のタブレットで撮影します。その後、撮影したものをまずは自分で見ます。「ここをもうちょっとああしたらよかったなあ」ということを自分で考えます。その後、チームで対話を始めます。そこでまた新たな作戦に気づきます。その後もう一度実践します。その成果を全体で最後に共有して作戦前と作戦後でどうだったのかというのを交流します。最後に授業の振り返りをします。タブレットを、実技を振り返るものとして活用した例になります。
次のページをご覧ください。活用推進校である成和西小学校５年生の算数の授業になります。先生から課題を聞くのですが、この時は課題を先生から子どもたちのタブレットに配信しました。体積を求めてみましょうということで、送られてきた写真に自分の答えを直接書き込んで考えました。その後、ペアで相談して、「私はこう考えた」というふうに考えたことを発表し

あいました。それを全体で大型モニターに映して共有をしました。先生からの答え合わせのあと、自分で振り返りをしました。
次のページをご覧ください。久米小学校５年生の算数の授業になります。先生からタブレットに課題を配信して、その課題について個人、ペア、全体という形で授業を進めました。
次のページをご覧ください。この授業の中で印象的だったのは、１つの教室の中で３つの学びがあったことです。先生に質問をして先生と学びを深めていくパターン、ペアでお互い意見を出し合って、ペアで学びを深めていくパターン、個人で取り組むパターン、これは何もタブレットに限ったものではなくて、これまでタブレットが入るまでの授業でももちろん行われたことですが、タブレットが入っても自然と授業の流れが作られていました。
次のページをご覧ください。柘植小学校３年生体育の実技になります。実技の場合は、撮影が多いのですが、撮影の仕方も子どもたち自身で１回目よりも２回目で工夫が入って、こんなところをちょっと撮った方がいいなということで対話を通して撮り方も変わってきました。マット運動、実技自体も変わってきました。
次は中学校の技術の授業になります。先生から課題を与えられ、その課題にまずは自分で取り組んでみる、その結果をグループで交流して再びどうしたらいいかもう１回自分で取り組んでみる、それを全体で共有して最後振り返るというものになります。
１７ページになります。タブレットＰＣを使った対話的な学びということで小学校では写真のようなタブレットの活用が進んでいます。右の写真については、授業参観の中でおうちの方も一緒に使ってもらいました。
最後の１８ページは、中学校のタブレットＰＣを使った対話的な学びになります。
写真のように子どもたちがタブレットを真ん中に置いて対話をするという授業が中学校でも小学校でも展開されています。
今年活用３年目になりますが、これまで進めてきた成果として、１人１台端末を活用するという、学習環境が各学校に定着しました。子どもたちがタブレットの画面を指差しながら対話を通して、自らの学びを深めていく習慣ができました。３年目となる今年は、その学びを続けつつ、学校の授業と家庭学習を切れ目なくつなぐことに取り組んでいます。これまでの宿題というと、授業でできなかったところを宿題でする、または、ドリル学習をして定着をはかるといった感じでしたが、そうではなく、先生たちが意図して個人で考えるものを家庭学習として出して、それをタブレットを使って家庭から学校に提出する、先生がチェックしたうえで次の授業で子どもたちの対話から始めるというように、家庭学習と授業、授業と家庭学習をつないでいく取り組みをしています。
一方、課題は全国的に言われているように、伊賀市の中でも学校間格差が広がっていることです。活用が進んでいる学校と活用が進んでいない学校の差が明らかになってきました。先生たちは月１回集まって自分たちの実践を交流する研修を行っているので、そこでどんな活用をしているのか積極的に情報交換を行うこと、また各学校に推進リーダーをつくって、そのリーダーを中心に研修を進めていくこと、今はオンライン研修もあります。その場に行って研修を受けることが難しくても、オンラインで３０分、１時間という限られた時間の中でたくさんの実

践を知って、またそれを学校で交流して「こんな使い方してみよう」「あんな使い方してみよう」ということで進めています。以上になります。

【事務局】ありがとうございました。ＧＩＧＡスクール構想３年目の取り組みということで説明いただきました。皆様からご意見、ご質問やご提案等ございましたらお願いします。

【市長】学校間格差が出てきているということなんですが、何が原因でどんなところに出てくるのですか。

【学校教育課】１人１台端末が入るまでは、先生たちはチョーク１本と黒板、ノート、教科書を使って授業をしてきました。今でもタブレットを使わなくても授業は進んでいきます。また４５分、５０分子どもたちはタブレット使いっぱなしかというとそうではなくて効果的な場面でタブレットを活用しています。ただ、無くてもできるというところで、先生たちの意識が大きいと思います。子どもたちの学びが深まるポイントがあるので、そこで効果的にタブレットを活用してくださいと伝えています。先生たちの意識改革と授業改革の部分で、進んでいない学校があります。
【教育長】そういう差がないようにしていかなければならないが、ほとんどのところは使っています。
【市長】パソコン学習指導員みたいな人が教育委員会から行くことはないのですか。
【学校教育課】現在、ＩＣＴ支援員はいません。指導主事が学校へ行くもしくは、端末の不具合が起こった時には保守業者が丁寧に対応していただいています。タブレット活用のアドバイザーとして、東京学芸大学の森本教授に助言いただいております。
【市長】パソコン学習指導員みたいな人を巡回させなければいけないのかもしれない。一般事務職でもＤＸ推進員が各セクションに居ることになっているが有効に稼働しているかは別として、置く、置かないは違いますからできればよろしくお願いします。子どもたちに格差があるということは一番いけないことだと思います。
【副市長】一定の効果があるという話を聞かせていただきました。具体的に学力に成果として表れているとかいうのは何かあるのですか。これを使ったことによって例えばこういったものがこれだけ上がったとか出ますか。
【学校教育課】現状ではありません。家庭学習の時間が少ないという課題があるので、授業と家庭学習をつなげるためのタブレットというのは、有効な手立てとなっていることを、先生方から聞かせてもらっています。
【副市長】推進校５校といっていましたが、あとの学校と比べて推進校の方がこれだけ上がったとかそういったデータはありますか。
【学校教育課】まだありません。
【副市長】先生方もなるほどと思える効果があって、そういったことで使ってもらえるのでデータとしてあればいいなと思いましたので是非お願いします。

【教育長】国の学力学習を調査の結果に表れるといいのですが、なかなか調査に表れなくて、やっぱり学習に定着したものがテストに出てしまうので、ドリルに取り組むとかもしないと結果が上がりにくいものです。
【市長】何かの結果というよりも子たちがこれをどういうものであって、どんな風な時にどのように使ったら自分に役に立つのか、しかもどうやったら研修できるのかといった基本をしっかりと身につけてもらったらいいのではないかと思います。僕らが昔学校に行くときの、そろばんをカバンにさして習字のセットを持っていく時代とは全然違うわけだから、子どもたちが小さい時からこういう状況になじんでいくこともあるが、使い方の可能性を身につければいいのではないかと思います。
【野口教育委員】この話を聞いていて、例えば１１ページの図形、ブロックの問題とかありますが、こういうのは、回転して見せたりとか、そういったことができるので非常に分かりがいいと思います。この単元の授業をモデル授業として、一つＩＣＴを活用したモデル授業をつくって各校で同じ授業をすることによって均一化を図ったりとか、先生もこれを活用することによって、一通り基本的なことができるようになるとか、そういったことをされたらどうかと少し思いました。例えば図形の単元だけ点数が上がったとか下がったとか、わかったりするのではと思ったので検討をお願いします。
【内藤教育委員】ここでは体育の授業を何パターンかあげていただいていますが、体育館の Wi-Fi 環境は整っているのですか。
【学校教育課】貸出用の Wi-Fi ルーターを各学校に配置してありますので、Wi-Fi 環境のない教室にはそれを持って行って使うという使い方をしています。
【内藤教育委員】それで問題なく使えているのですか。
【学校教育課】問題はありません。
【内藤教育委員】この例にある体育の動きを客観視するという、今までになかった発想の切り口は、学びが深くなるポイントだと思います。体育館のみならず運動場であるとか、例えば理科の校外の観察とか、そういったところにも活用できればいいと思いますので、今は貸出用を使っているということなので、より環境を広げていただく、充実させていただくことを市全体として経費もかかることではありますが教育の一つのツールなので、していただければより広がるのではという思いが一つと、学びが深まる教育的効果が上がる以外にもすごくいいと思うことは、なかなか子どもの声を平等に一度に一瞬にして拾うことは難しいことなのですが、これを使うことで良い側面も悪い側面もありますが、そういうことができると思います。学習面のみならず生活面の中で集計を取るとか、先生としてはストレスなくできるツールであるということ、体面的とか対人的に消極的な子どもさんやそういうことに障がいがある子どもさんにもこれを使うことによって、はじめて声を聞いた、問題なく会話ができたといったトークとしての使い方も利点だと思います。先生方がより使いこんでいただくことによって学習的効果以上の効果を知っていただくことで問題となっていた格差みたいなものを側面からも薄れていったらいいのではという気がします。環境の整備とあと気になるのが７，０００台のタブレットは基本消耗品ですので、これをいかに潤沢に今後も心配なく、市として子どもたちに供給し

ていける体制をとっていただけるかが大事なことだと思います。
【市長】一斉に国が入れたものは、一斉に更新の時期が来るので、みんな同じ思いがあって、国で何とかしほしいということになると思いますよ。
【中教育委員】子どもたちが小さいころからタブレットを使い、なかなかパソコンが使えない大人がいる中でタブレットを使いながらいろいろなことを調べていく、基本使うことで、すべての子どもたちがまんべんなくいろいろなものに興味を持ってもらいたい。教科にも興味を持って学んでいこうとか、知りたいなと思う気持ちになるツールになってほしいと、各学校をまわらせてもらいながら感じさせてもらいました。最近、中学校の子どもたちをみていて、学力の差がものすごく激しいのがひしひしと感じられるというのが、ここ最近子どもたちに何が起こっているのかと思いながら、折角いろいろなものを導入してもらって学習している中で、その教科に興味が持てない環境が感じられるのが残念と思うので、そういうことがない様に子どもたちがいろいろことを取り入れてもらう中で、環境を揃えてもらっている中で、興味を持ち、進んでいける子どもたちを育てていってほしいと思っています。
最近の子どもたちの様子を見ていて、興味を持てない子どもがいるのがすごく残念だと思っています。こういったものを使いながら、何故自分たちは学ぶのかということを、興味を持てる環境をもっとつくっていってほしいと思います。ただこういった良いものを使っているのに様々な教科に興味が持てない、感じることができないのが、もしかしたら半分以上の子どもたちがいるのではと最近感じています。学校がどんな感じでタブレットを使っているのか見させていただいてはいますが、何故いろいろな科目に興味が持てない子どもがいるのがすごく残念と思っています。それが何とか子どもたちがいろいろなものを使いながら興味が持てるようになってもらいたいと思っています。何回か中学生たちも学力テストが年１回、もう終わっていますが普通であれば平均値が真ん中にあってほしいのがずいぶん下のところに平均値があるのが各学校の中学３年生の結果を見たときに一生懸命やっていたのに子どもたちに何が伝わってないのか、最近考えています。こういうタブレットを使いながらもっと子どもたちが、興味が持てる環境をつくっていかないといけないと思っています。
【教育長】できる子と少し学習に興味がない子の差はいくつか出てくるわけで、今まであれば正規分布だったのが「ふたこぶラクダ」になってしまったりしている。そのことは各学校でも十分感じているところです。
【中教育委員】「ふたこぶ」になればいいともあるが、下のところに山がある、１００点以下のところに山があるのを見たときに子どもたちがこれから高校受験を迎える、世の中に出ていく、大学受験といろいろと進んでいってもらいたい中で、子どもたちに何が起こっているのかと思います。せっかくタブレットを入れてもらって、もっと子どもたちが、興味が持てる環境をつくっていっているはずなのにどうしたのかと感じています。学校でももっと活用できるように進めてもらいたいし、先生たちも学んでほしいと思います。
【市長】昔から、文系だとか理系だとかといった傾向がありますが、こういうＧＩＧＡスクールのような機械を使うのが得意な子どもとそうじゃないという子どもはいるのですか。
【学校教育課】各学校をまわって授業をみる中で得意、不得意はあります。得意な子どもの中

には、先生の技術を上回っているような子どももいるので、授業で困ったときに先生を助けてくれる子もいます。みんなが同じレベルではないので、対話を通し自分一人でできないこともペアで取組んでいます。まったく触れないでは、この後も困りますし、高校でもＧＩＧＡスクール構想が始まって、１人１台端末活用が始まっているので、子どもたちは良いのか悪いのかは置いといて、活用からは逃れることはできないので、慣れていくことが大事であると思います。
【市長】慣れるということは、パソコン特有の言語になれるということですね。いろいろなことについて得手、不得手というのが何につけてもあるものと思います。
【教育長】ただ、いろいろやってきて、東京学芸大学の森本先生に来てもらって３年間ご指導いただいているが、東京と比べるとどうだろうか、他に比べて伊賀市はどうなのか、「伊賀市の子どもたちは、他と比べてもある程度進んでいますよ」というようなこともおっしゃっていただいていますので、全国的なことを言うと、「全国平均よりも上にいっていますよ」と評価をいただいています。ただこれが学力に直接結びつくかとか、意欲にどう結びつけていくかとか、いろいろ課題はあるのでこればっかりに頼っていてもなかなか難しいところがあって、どう効果的に使うかというところになってくると思います。
【市長】成和西小でのモデル事業は、生徒にも世間にも好評であったと聞いています。
【教育長】松尾芭蕉のことを使ったのもありましたし、コンテンツを作ってあれば授業の中で使えるし、今までの資料集から探してとは違いますので、資料を自分で見つけてきて調べられるということが非常に有効だと思います。

【事務局】よろしいでしょうか。では、この項目については一旦終了とさせていただきます。それでは、本日のすべての項目について、改めて何か質問やご提案等がございましたらよろしくお願いいたします。

【市長】教師以上に進んでいる子どもも一定いるといった話もあったが、ついていけない子どもたちへのフォローも大事だし、それと同時に越えてしまっている子どもたちもしっかり個性を伸ばすという意味ではケアをしてあげないといけないと思いますが、そういうことについては、今の教育ではなかなかフォローしきれないですけど今後どうしないといけないと思いますか。
【学校教育課長】新しい教育改革で令和の日本型教育の中に、個別最適な学習と協働的な学習の大きく２つが取り上げられていて、個別最適化というところをＧＩＧＡスクールと重なる部分になりますが、できるようにそれぞれの授業のスタイルの中に取り入れていくことは、心がけ、試しているところです。例えば学力テストの結果をＣＢＴでやると、今であれば問題をやってみる、出来なかったらこの問題をやってみてと指示されて、さらに出来なかったら、もう一つ、逆にできたらこの問題へ進むようなやり方もある。簡単ではないが、できる子にはできる、さらにグレーアップした課題に取り組むといったことも大事にしていかなければならないと思います。

【市長】研究課題ですね。
【野口教育委員】アンケートの話になりますが、結果を踏まえて各部局に具体的にアンケート結果を伝えているということを伺ったが、その結果を掘り下げて各部局が具体的にどういう取り組みをして、そして市民の民意というか意見を反映した結果というものをどこかで公表する場はありますか。
【総合政策課長】アンケートの結果を踏まえて、自分たちのやっている仕事がどうなのかということをまず分析をして、次の取り組みに生かすように毎年施策ごとに進行管理を行っています。我々の考えている課題の認識とか、あるいは次にどういった取り組みしていけばいいのかとか、市が考えていることがいいのかということを外部の委員さんにも見てもらっています。その結果も外部委員さんの意見も公表しますし、我々が考えたことに対して外部委員から指摘を受けて修正したものを見ていただきながら毎年やっています。
ホームページを見ていただくと、まちづくりアンケートの結果が載っていて、施策の庁内でまとめた報告書を公表しています。アンケートの結果がこうだったから、こういうところに課題があるといったことも書いて、十分に書ききれているかどうかは問題はあるところでもありますが、そういった形で回しており、それを公表し、毎年、監査委員による監査も受け、議会でも９月に決算審査があってそういった資料を基にしながらもう一度チェックされるという仕組みになっています。
【野口教育委員】アンケートの母数が７００では少なすぎると思いますが。具体的に母数としてどれくらいの数があればいいのか、何か線引きをしているのですか。
【総合政策課長】誤差にもよりますが、最低でも４００は必要を思っています。揺れを見たときに最低４００、できれば１，０００ぐらいあれば、ある程度一定の信憑性が確保できると思います。
【野口教育委員】よく１，０００という数字は聞くのですが。
【総合政策課長】本当に数字できっちりと追いかけないといけないデータのものと、まちづくりアンケートであれば市民の皆さんの感覚を問うているので、そこまでの数字の零点いくらまでを気にしないといけないのかというと、そこまではないと思いますので、ある程度の傾向はつかみたいと思っています。できれば１，０００までいければと毎年思っています。
【野口教育委員】あと聞き方の問題で、左右されるという話がありましたが、この聞き方であればそうなるよねといったものがありますよね。例えば地域の景観が保てるように努めているという問いには、なかなか参画できない、当然結果としては低くなるのではないかと思います。アンケートの内容は、年々の推移をみるためになかなか変えられないものなのですか。
【総合政策課長】総合計画は４年で見直しをしているので、できれば４年間は変えたくないのですが、あまりにもおかしな指標を持ってきているのであれば途中でも変更していいのではと思っていますが、できれば昨年との比較を行いたいのでそのままでと考えています。
【市長】ＬＧＢＴＱについて、伊賀市も比較的先進的な取り組みを進めていますが、小学校で何か気を付けていることはあるのですか。小学校時代に実態として萌芽があるのですか。あるのであればどういった対応をしているのか、実態はどうなっているのですか。

【学校教育課長】１３人に１人はと統計的にはあり、まずは学校としてはそういった子どもさんが自分の目の前の子どもさんの中にいるという前提で指導にあたるという職員の研修を行っています。特に自分の性に違和感というのがなくても、何となくスカートは嫌いとかという子どもさんもいるというのも聞いています。小学校時代に違和感を覚える子どもさんのハードルになっているのが中学校の制服です。このあたりを今回、ブレザー型にするということで、かなりハードルを低くしていただいたということで、今後そういった子どもさん達も過ごしやすくなるということはありますが、自分が、こうなんだとカミングアウトする子どもさんは少ないが、気になる子どもさんはそれぞれの学校にいると聞いています。
【市長】どういうふうに対応していくのか、どういうふうにして見つけてあげるのか、なかなか大変なことでしょうね。
【教育長】小学校のころであれば、担任なり、養護の教諭なりに相談したりして、そういうところからわかってくることが多くなっています。中学校でも今現実には、今年の１年生の中には、来年制服が変わりますが、今年については、体操服で学校に行くけれども、制服が変わればその制服を買いますと言っていただいている子どもさんもいます。中学校になるとはっきりしてきますので、制服を変えるのは、子どもたちのハードルが低くなると思いますし、その子供さんにとって学校の生活がしにくくならないようにしていくのが一番であると考えています。
【中教育委員】アンケートの最後に記述の部分があるのですが、たくさんあったのですか。
【総合政策課長】書いていただいている方は、わりと長文でも書いていただいています。
【中教育委員】気になる記述の意見などはありましたか。
【総合政策課長】自由記述であるのと匿名で書いてきているということも気を付けないといけませんが、一定自由記述で出てきた意見の中でそれぞれの関係部局とも共有はしていますが、それぞれのキーワードと結びつきそうな言葉を庁内でも共有するようなことができればいいと思っています。今もアンケートをまとめていただいている業者と相談はしていますが、ひらがなと漢字が混ざっていると難しいとか、技術的な問題もあって正確なものは出ませんが、ある程度、この言葉にマイナスの言葉がついているとか、そういったことを本来みんなで共有出来ればといいと思っています。それぞれの関係するような言葉を共有させてもらえればと考えています。
【中教育委員】最初に伊賀市に住み続けたいというところで、そうは思わないという方がいるというところがあって、そのあたりで何か意見を書いてあるのかと思いました。ここに住み続けない、変わっていこうとする方は、何が嫌なのかと思いましたので聞かせていただきました。
【総合政策課長】マイナスの意見やマイナスの気持ちを持っておられる方が、どういったコメントを書いているのか、あるいはプラスの人がどんな意見を書いてあるのか、そういったことをデータ化できればと、課題として考えています。
【中教育委員】高校生たちと話をしていて伊賀市から大学を受験するのに伊賀を出たいと言っているのを聞いて、出ていったら帰ってこないのかと聞いたら、帰ってきたくない理由を聞いたらユニクロがないという単純な意見で、よそにはあるけれどもここにはないからといったこ

とを聞くと、そういった単純な理由でも出ていきたいのかと感じました。高校生たちが、受験を迎えるたくさんの子どもたちが伊賀から出ていろいろな地域にかわって行ってもそのまま帰ってこなかったりとか、伊賀に帰ってきたいとか、出ていった子も帰ってきたら伊賀は落ち着くと言ってはいるけれども、伊賀というのは住みたいとたくさん意見があったのか、できれば出たいとするのはたくさんではないが何が足りないのか意見あるのではと思って聞かせていただきました。

【総合政策課長】若い人たちで外に出たいと思っている子どもたちが、何か不満に思っている事はどれなのかデータで見られるようになればと理想は持っていますが答えが出ていないので課題とさせていただきたい。

【内藤教育委員】美術博物館について、具体的な話になりますが、運営していただく時が来たら、前に福井で見たことですが、博物館の案内係を中学生のボランティアの人たちが行っていました。それは中学生の興味のある子どもを募って、少し前勉強をして、おもてなす側に子どもたちをたたせるといったことが、郷土愛を育むし、郷土のことを知るということは、子どもたちがよその大学に行って、よそに就職して住み着いても自分の郷土がここで、そこでこういった良いものがあるといった事を話していくことも大事で、観光客を引き寄せることにもなるので、子どもたちを参画させてほしいと思います。より良い環境に集まってくる資料は大事ですけれども伊賀市はすごく広くて、けっこう端々に良い史跡や名勝があります。これを写真などで飾っていただくよりは新しくできる美術博物館を拠点に、はとバスチックなものをつくってもらって皆さんに巡ってもらう、観光地伊賀市ならでは、美術館を拠点として半日なり１日で巡るツールも持ち合わせていただき、来ていただいた方が１日だけではなく１泊して２日間楽しめる、こんな楽しみ方、あんな楽しみ方ができるような拠点地になるような案を考えていただければとすてきだと思います。

【美術博物館建設準備室長】以前、三重県立美術館に行ったときにボランティアや友の会の人たちが活躍していることも聞かしてもらったことがありましたので、いろいろなことを勉強させていただきながら、伊賀市として使えるものを使っていきたいと考えています。

【事務局】よろしいでしょうか。それでは最後にその他の事項として皆さま方から何かございますか。無ければ事務局からも特にございませんので、これで終了とさせていただきます。

今後とも、ご意見、ご提言等いただきますようお願いいたします。

本日は、ありがとうございました。